

日本ラテンアメリカ学会 第31回定期大会 プログラム

会場：京都大学（京大会館）

期日：2010年6月5日（土）・6日（日）

共催：京都大学地域研究統合情報センター

6月5日（土）

9:00～	受付	エントランスホール
10:00～12:00	パネル A (文化遺産の観光商品化)	会議室 102
	パネル B (冷戦とラテンアメリカ)	会議室 211
	分科会 1 (文学)	特別室 SR
	分科会 2 (文化)	講演室 210
	分科会 3 (メキシコ)	会議室 212
12:00～14:00	昼食	
	理事会	会議室 115
14:00～16:00	パネル C (メソアメリカ文化遺産)	会議室 102
	パネル D (クリオーリョ世界の实態)	特別室 SR
	パネル E (ボリビア)	講演室 210
	分科会 4 (ブラジル)	会議室 211
	分科会 5 (社会政治発展の諸相)	会議室 212
16:15～17:15	記念講演	講演室 101
	演題 “Out of the Shadow?: The Maturing of Latin America in the 21 st Century”	
	講演者 ビクター・バルマー＝トーマス氏 (ロンドン大学名誉教授)	
17:30～18:30	総会	講演室 101
18:40～20:30	懇親会	レストラン「このえ」(京大会館地階)

6月6日（日）

9:00～	受付	エントランスホール
10:00～12:00	特別パネル (ハイチ)	講演室 210
	パネル F (ラウル政権下キューバ)	特別室 SR
	分科会 6 (外交)	会議室 211
	分科会 7 (先住民)	会議室 102
12:00～13:30	昼食	
	新理事会	会議室 115
13:30～16:30	シンポジウム 21世紀のラテンアメリカ、ゼロ年代	講演室 101

日本ラテンアメリカ学会 第31回定期大会 プログラム

6月5日（土曜日）

9:00～	受付	エントランスホール
10:00～12:00	研究報告	パネルA、パネルB、分科会1、分科会2、分科会3
12:00～14:00	理事会	会議室115
14:00～16:00	研究報告	パネルC、パネルD、パネルE、分科会4、分科会5
16:15～17:15	記念講演	講演室101
17:30～18:30	総会	講演室101
18:40～20:00	懇親会	レストラン「このえ」（京大会館地階）

5日（土曜日）午前の研究報告（10:00～12:00）

●パネルA 文化遺産の観光商品化と新しい伝統の創出	【 会議室 102 】
コーディネーター・司会 小林 致広（京都大学）	
「世界遺産チチェン・イツァーは誰のもの？—地元露天商の侵入とその背景—」 杓谷 茂樹（中部大学）	
「文書化された『7つの大罪』劇の台本—ボリビア・オルロのカーニバル—」 児島 峰（獨協大学兼任講師）	
「観光資源として演出される『死者の日』—メキシコ・ワステカ地方の事例から—」 河邊 眞次（大阪経済大学兼任講師）	

●パネル B 冷戦とラテンアメリカ	【 会議室 211 】
コーディネーター・司会 ロメロ=ホシノ、イサミ（早稲田大学）	
「冷戦とメキシコ外交—1954年のグアテマラ危機を中心に—」 ロメロ=ホシノ、イサミ（早稲田大学）	
「ブラジルの対米自主外交とアメリカのAid Leverage—クアドロス・グラール政権期を中心に—」 金 ハンセミ（東京大学大学院生）	
「ペルー・ベラスコ政権の外交政策（1968～1975）」 磯田 沙織（筑波大学大学院生）	

◆分科会 1 文学—ラテンアメリカ文学に見る歴史・思想・芸術—	【 特別室 SR 】
司会 山蔭 昭子（大阪大学）	
「小説世界にみるカルロス・フエンテスの〈歴史〉認識」 成田 瑞穂（神戸市外国語大学）	
「アレホ・カルペンティエルの小説における絵画と寓意」 穂原 三佳（神戸市外国語大学非常勤講師）	
「メキシコ詩人ハビエル・ビジャウルティアにおけるシュルレアリスム観の転換」 南 映子（東京大学大学院生）	

◆分科会 2 文化—ラテンアメリカにおける文化的表象の諸相—	【 講演室 210 】
司会 北森 絵里（天理大学）	
「巨人と小人のフロンティア—ペドロ・サルミエント・デ・ガンボアとマガリャンイス海峡先住民表象—」 長尾 直洋（松阪看護専門学校非常勤講師）	
「音楽とトランスナショナリズム—ペルー人のミュージシャンを中心に—」 ロッシ、エリカ（一橋大学大学院生）	

◆分科会 3 メキシコ—社会変革に向けての諸課題—	【 会議室 212 】
司会 高橋 百合子（神戸大学）	
「ストリート・チルドレン集団の特徴—家父長的社会集団を形成するメキシコ市大都市圏における事例—」 小松 仁美（淑徳大学大学院生）	
“La reforma del Estado en México” Rosales Sierra, Patricia（慶應義塾大学非常勤講師）	

5日(土曜日)午後の研究報告(14:00~16:00)

●パネルC メソアメリカ文化遺産の再考—伝統／変容の再認識と社会還元— 【会議室102】

コーディネーター・司会 杉山 三郎(愛知県立大学)・嘉幡 茂(メキシコ国立自治大学非常勤研究員)
「古代都市ショチカルコーブランド化しない世界遺産」 嘉幡 茂(メキシコ国立自治大学非常勤研究員)
「変容し続ける古代都市テオティワカンのイメージ」 杉山 三郎(愛知県立大学)
「ゲレロ州先住民村落のPelea de tigresをめぐる文化復興」 小林 貴徳(同志社大学非常勤講師)
「クエルナバカ大司教座聖堂壁画」 谷口 智子(愛知県立大学)

●パネルD クリオーリョ世界の事態に迫る—17世紀メキシコ市の事例から— 【特別室SR】

コーディネーター・司会 井上 幸孝(専修大学)
「シグエンサ・イ・ゴンゴラにおけるクリオーリョ主義的言辞とクリオーリョ像」 中井 博康(津田塾大学)
「クリオーリョという観点から見た先住民記録者アルバ・イシュトリルショチトル」 井上 幸孝(専修大学)
「17世紀メキシコ市参事会議事録から読み取るクリオーリョの動向」 立岩 礼子(京都外国語大学)

●パネルE ボリビア社会における多元的な民族性の形成 【講演室210】

コーディネーター・司会 藤田 護(東京大学大学院生)
「20世紀後半ボリビアにおけるアイマラ語のラジオドラマ—政治と文学の間で—」 藤田 護(東京大学教務補佐員)
「ボリビア村落部におけるアフロ系住民の民族意識—オーラルヒストリーをもとに—」 梅崎 かほり(慶應義塾大学非常勤講師)
「イソセニョ・グアラニ族の大首長権—先住民運動に埋め込まれた意味—」 久保 修太郎(東京大学大学院生)
コメンテーター 宮地 隆廣(同志社大学)

◆分科会4 ブラジル—「秩序と進歩」の現状— 【会議室211】

司会 小池 洋一(立命館大学)
「リオデジャネイロの治安—組織犯罪と警察—」 山田 睦男(国立民族学博物館名誉教授)
「ブラジルにおける労働者党の歴史とルラ政権誕生の経緯」 住田 育法(京都外国語大学)
「2007年以降のブラジルの違憲審査制」 佐藤 美由紀(杏林大学)
「ブラジル北東部バイーア州におけるMST(土地なき農村労働者による運動)の展開と『近代』—運動参加者と土地との関係を通して—」 高橋 慶介(一橋大学大学院生)

◆分科会5 社会政治発展の諸相—各国におけるナショナル、ローカルレベルの試み— 【会議室212】

司会 内田 みどり(和歌山大学)
「コスタリカのマヌエル・アントニオ国立公園における持続可能な観光のための一考察」 丸岡 泰(石巻専修大学)
「コロンビアにおける生存と平和をめざすローカル・イニシアティブ—鉱物資源ブーム下の金鉱採掘コミュニティの事例から—」 幡谷 則子(上智大学)
「ボリビアにおける大衆参加法と社会主義運動党(MAS)の台頭過程—MASを構成する社会組織の全国的ネットワークはいかにして機能したのか—」 舟木 律子(中央大学)
「コスタリカ2010年2月国政選挙の意味するもの」 竹村 卓(富山大学)

■記念講演(16:15~17:15)

101】

【講演室

“Out of the Shadow? :
The Maturing of Latin America in the 21st Century”
Victor Bulmer-Thomas (Emeritus Professor, London University)

6月6日（日曜日）

9:00～	受付	エントランスホール
10:00～12:00	研究報告	特別パネル、パネルF、分科会6、分科会7
12:00～13:30	新理事会	会議室115
13:30～16:30	シンポジウム	講演室101

6日（日曜日）午前の研究報告（10:00～12:00）

●特別パネル ハイチ民衆との連帯を求めて 【講演室210】

コーディネーター・司会 石橋 純（東京大学）

「都市の記憶—1983年のポルトープランス—」 荒井 芳廣（大妻女子大学）

「私が見たハイチ 1988～2008—地震に至るまでの20年—」 佐藤 文則（フォトジャーナリスト）

●パネル F ラウル政権下キューバの政治と社会 【特別室SR】

コーディネーター 山岡 加奈子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

司会 狐崎 知己（専修大学）

「キューバとラテンアメリカ左派政権との関係」 田中 高（中部大学）

「キューバ政治の展望」 小池 康弘（愛知県立大学）

「キューバと福祉国家論」 宇佐見 耕一（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

「キューバ・米国関係の今後の展望」 山岡 加奈子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

◆分科会 6 外交—米州関係再考に関わる諸問題— 【会議室211】

司会 浜口 伸明（神戸大学）

「キューバ革命以降の米・キューバ移民政策の推移と今後の課題」 山田 泰子（前在キューバ日本大使館専門調査員）

「『新国家』体制の対外政策決定過程—対外政策決定のアリソン・モデルを手掛かりに—」 高橋 亮太（筑波大学大学院生）

「ブラセロ・プログラム延長と『非合法移民問題』をめぐる米墨労働組合の対応—1946～1954年を中心に—」 戸田山 祐（東京大学大学院生）

「1950年代におけるアメリカの対ラテンアメリカ技術援助政策」 江原 裕美（帝京大学）

◆分科会 7 先住民—アイデンティティ模索の歴史的考察— 【会議室102】

司会 北森 絵里（天理大学）

「中米先住民運動と政治的アイデンティティ—メキシコとグアテマラの比較—」 池田 光穂（大阪大学）

「ペルーとボリビアの先住民政治比較—社会の『強さ』の歴史的経路依存性—」 岡田 勇（筑波大学博士特別研究員）

「ユカタン・マヤの文化復興運動—Sara Zapata と Briceida Cuevas の眼差し—」 吉田 栄人（東北大学）…

「18世紀メキシコ・イスミキルパン行政区におけるインディオ村落共同体の分離と広域的協調」 和田 杏子（青山

6日（日曜日）午後のシンポジウム（13:30～16:30）

■ 21世紀のラテンアメリカ、ゼロ年代 【講演室101】

司会 村上 勇介（京都大学）

パネリスト 遅野井 茂雄（筑波大学） 狐崎 知己（専修大学） 山崎 圭一（横浜国立大学）

Out of the Shadow? :

The Maturing of Latin America in the 21st Century

Victor Bulmer-Thomas (Emeritus Professor, London University)

講師ビクター・バルマー＝トーマス氏略歴

- 1948 年 生まれ。
- 1975 年 オックスフォード大学経済学博士。
- 1978 年 ロンドン大学クイーンメリー校助手。
- 1988 年 同上准教授。
- 1990 年 同上教授。
- 1992～98 年 ロンドン大学附属ラテンアメリカ研究所所長。
- 2001～06 年 英国王立国際問題研究所所長。

主要業績

- 2006 (co-editor with John H. Coatsworth and Roberto Cortés Conde) *The Cambridge Economic History of Latin America. Vol. 1: The Colonial Era and the Short Nineteenth Century.* Cambridge: Cambridge University Press.
- 2006 (co-editor with John H. Coatsworth and Roberto Cortés Conde) *The Cambridge Economic History of Latin America. Vol. 2: Long Twentieth Century.* Cambridge: Cambridge University Press.
- 2001 (editor) *Regional Integration in Latin America and the Caribbean: the Political Economy of Open Regionalism.* London: Institute for Latin American Studies.
- 1999 (co-editor with James Dunkerley) *The United States and Latin America: the New Agenda.* ILAS and Harvard University.
- 1996 (editor) *The New Economic Model in Latin America and its Impact on Income Distribution and Poverty.* London: Macmillan and ILAS.
- 1996 (co-editor with Mónica Serrano) *Rebuilding the State: Mexico after Salinas.* London: ILAS.
- 1995 (co-editor with D'Alva Kinzo, M.) *Growth and Development in Brazil: Cardoso's Real Challenge.* London: ILAS.
- 1994 *The Economic History of Latin America since Independence.* Cambridge: Cambridge University Press (邦語訳 2001 『ラテンアメリカ経済史—独立から現在まで—』名古屋大学出版会)。
- 1987 *The Political Economy of Central America since 1920.* Cambridge: Cambridge University Press. (近年は、カリブ海地域の経済史をまとめている。)

(Outline of conference)

The first decade of the new century has now ended and Latin America has started to emerge from the shadow. A new, more equal, relationship has been formed with the United States and the European Union. This has been made possible not only by the focus of the United States on counter-terrorist activities, but also by the diversification of the region's international relations. Asia, especially China, has become a much important partner as Latin America takes advantage of the growing Asian demand for the commodities in which the region is specialized.

The increase in demand for the region's commodities has helped to strengthen the fiscal position of many countries and render them less vulnerable to downturns in the world economy. This was put to the test in 2008/9 when regional GDP fell far less than in the United States or the European Union despite the fall in world trade - the reverse of the historical pattern. The region's economies, with the exception of Mexico, are now much more resilient than in the past.

The strengthening of the fiscal position since the beginning of the new century has made possible a serious effort to reduce poverty not only in relative but also in absolute terms. Although poverty rose in 2008/9, not all the gains of the last few years have been wiped out. Thanks to imaginative and innovative social programs, Latin America is now much closer to its dream of reducing poverty significantly and even meeting the Millennium Development Goals.

Economic growth and poverty reduction have also helped to consolidate democracy in the region. Institutions have been tested and new constitutions have multiplied, but the region is slowly developing democratic systems that correspond more closely to the underlying social realities. The pessimism expressed by many outside commentators on the progress of democratization in the region is not justified.

Part of the reason for optimism in this regard is the emergence of a much stronger indigenous movement and its incorporation into the democratic process. This long overdue process is bound to be seen as threatening by many established interests, but it has proceeded relatively smoothly in those countries where the indigenous population is a large part of the total. The indigenous movements are here to stay and their willingness to work within the democratic process is very encouraging.

The demographic transition, bringing a welcome fall in the rate of growth of population, has also reduced the pressures on Latin American societies. Indeed, the region is starting to reap a demographic dividend as a result of its large population of working age and the reduced number of dependents. This window of opportunity will not last for ever, but it will help the region in the next generation. And out-migration from some of the smaller countries has provided a safety valve as well as an important flow of remittances back to their home countries.

There are downsides and no objective account of the region in the last decade can avoid addressing them. Human insecurity is a serious problem and becoming worse in some cities. The environment continues to deteriorate as a result of deforestation, urban pollution and water contamination. Many institutions, including judicial ones, are very fragile and corruption has not declined with the rise of market-friendly policies. Yet the balance is strongly in favour of the positive and Latin America has every reason to be cautiously optimistic as it enters the second decade of the 21st century.

21世紀のラテンアメリカ、ゼロ年代

司会：村上勇介（京都大学）
パネリスト：遅野井茂雄（筑波大

学）

狐崎知己（専修大学）
山崎圭一（横浜国立

大学）

20世紀後半におけるラテンアメリカの政治や経済などの展開を10年単位で振り返ると、それ以降の地域全体の方向性や主要な特徴の出発点となるできごとが各年代に起きていることが指摘できる。

たとえば、第二次世界大戦後に各国で追求された輸入代替工業化路線は、1948年に創設された国連ラテンアメリカ経済委員会が、1929年の世界恐慌以降に工業化を余儀なくされたラテンアメリカ各国の状況を理論化したことを契機として定着した。同じ1948年には、米州機構が設立され、ラテンアメリカも冷戦構造のもとにおかれる。

そうしたなか、1959年にはキューバ革命が起き、アメリカ合衆国のラテンアメリカへの一層の介入を促すとともに、「第二のキューバ」の出現を阻止するため、1960年代半ばから、国家発展を目標とする軍事政権が多くの国で誕生する。さらには、南北問題が国際社会の争点として浮上したことを背景に、第三世界との連携を求める民族主義が高揚し、ラテンアメリカ諸国だけからなる地域協力機構が構築された。

しかしながら、1970年代に入ると、輸入代替工業化を主軸とする国家主導型発展路線は、狭隘な国内市場、財政・国際収支両面での赤字、対外債務の累積といった制約に石油ショックなどの国際的な危機が重なり、行き詰まりをみせる。経済社会状況の悪化のもと、1979年にエクアドルで民政移管が実現し、「民主化」の波は1980年代に各国へ波及する。ただ他方、同年にはニカラグア革命が起これ、中米地域にとっては紛争の80年代となる。

また、1979年の第二次石油ショックは、1982年以降の債務危機を帰結し、ハイパーインフレに象徴されるように、経済社会の不安定化を加速した。そうしたなか、1970年代までの国家主導型発展モデルに代わり、構造調整や市場経済化といった新自由主義路線がとられる。1989年には、構造調整の履行を条件に債務を削減するブレディ・プラン、そして、財政規律、規制緩和・自由化、民営化、社会政策プログラムのターゲット化などからなる政策合意、いわゆるワシントン・コンセンサスが提示され、新自由主義路線は、90年代を席卷する潮流となる。それは、アメリカ合衆国主導の自由貿易圏構想にもつながった。

だが、新自由主義は、歴史的な格差構造を大きく変えるには至らず、むしろ格差を拡大した。そうした状況において、新自由主義に異を唱える左派勢力が台頭する。1998年には、ベネズエラで、新自由主義とアメリカ合衆国の覇権に強く反対するチャベスが大統領に就任し、そうした左派勢力の最初の政権となった。

それでは、21世紀最初のゼロ年代には、今後のラテンアメリカの展開に大きく影響を与えるようなできごとがあったのであろうか。あったとすれば、それは、具体的にどのようなことで

あり、またどう今後の展開を規定する可能性があるのか。それは、中長期的、何世代にも

シンポジウム 21世紀 6月6日(日) 13:30~16:30【会議室 101】

わたって影響を及ぼす可能性があるのか。さらには、ラテンアメリカ全体でほぼ同様に影響が見られるのか、あるいは、地域的に、ないしは国によって、ばらつきがあると考えられるのか。

本シンポジウムは、以上の観点などを検討することをつうじて、21世紀始めの10年間に見られたラテンアメリカの動向を探ることを試みる。バルマー=トーマス氏による前日の記念講演を受け、出席者全員で議論を深める機会としたい。最初に、報告者の方々にはそれぞれの専門分野の観点から提起いただく。その後、議論の時間を通常よりも多く設定するので、多様な専門的見地から、皆様の議論への積極的な参加をお願い申し上げます。